

第4章 考察

1 日向洞窟遺跡西地区の槍先形尖頭器製作を技術基盤とする石器群と東日本における位置づけ

A 日向洞窟遺跡西地区の石器群

硬い無遺物層（V層）によって上層と隔てられたVI層出土の遺物はきわめて一括性が高く、縄文時代草創期に属する（Fig.32）。微隆起線文土器などとともに出土した石器は、剥片類も含めると膨大な量であり、このうち1,678点の各種トゥールとその未製品について報告してきた。以下これについて考察する。

（1）平面分布

東西約10m、南北約40mの調査区（約400m²）のうち、遺物は主に南側の平坦面に分布し、さらに東西の調査区外へ続いている可能性が高い。日向洞窟とその前庭部、そしてこれに連なって西側に展開する平地とを総合的に捉えた中で、本遺跡の空間利用について検討していく必要があるだろう。

調査区内には、平面分布の状況から少なくとも4

か所の石器ブロックが確認できる。より厳密なブロックの認定には視覚的に抽出される集中部だけでなく、母岩の分布や接合関係などをも含めた総合的な検討が必要であるが、本報告では現段階で把握できたトゥール類1,678点について2×2mのグリッド単位で把握した平面分布状況をもとに、便宜的な区分を行った（Fig.100-1）。

4か所のブロックのうち、もっとも規模が大きいのはブロック2であるが、ブロック1は調査区外の東側に、ブロック3は西側に展開する集中部の一部であると考えられる。なお、石器の平面布状況には、各ブロックとも器種およびその製作工程による偏在性があまり認められない（Fig.100-2・3）。

（2）器種組成

点数の多いものから石鎌549点、槍先形尖頭器428点、エンドスクレイパー264点、スクレイパー類226

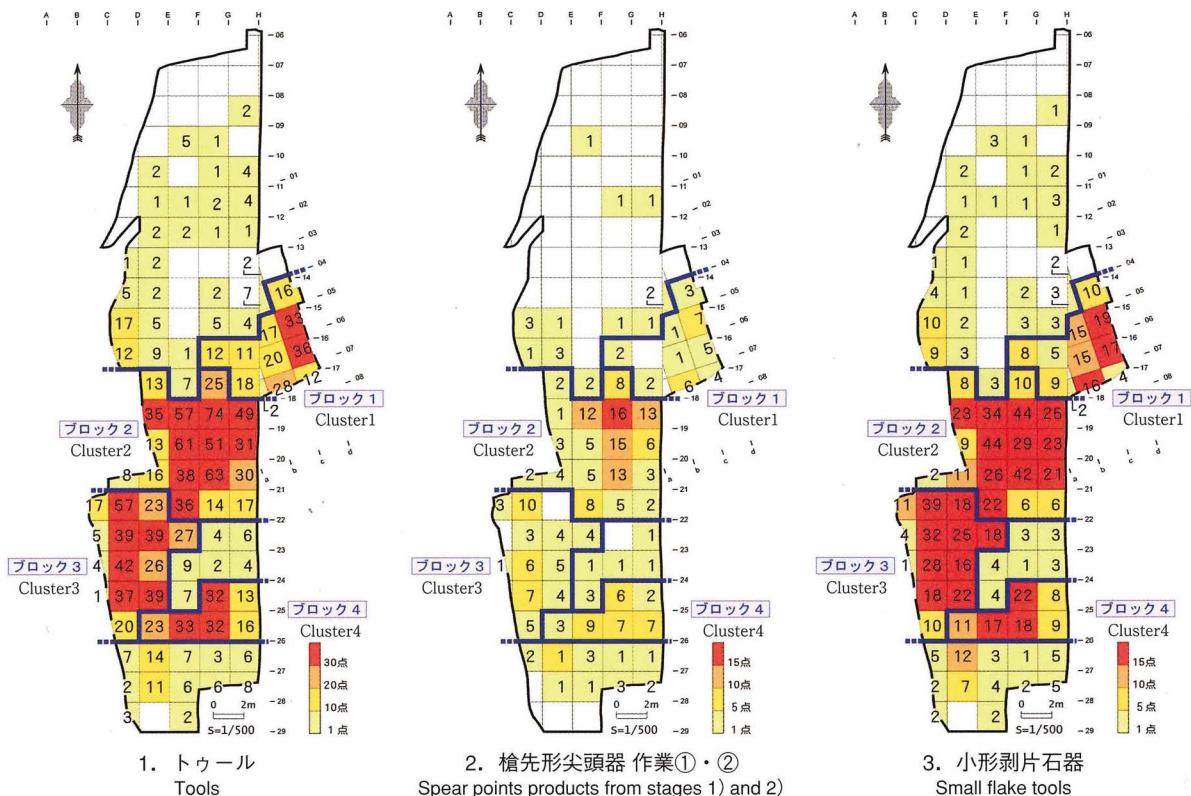


Fig.100 槍先形尖頭器作業①・②資料と小形剥片石器の平面分布
Distribution of spear point products from stages 1) and 2), and of small flake tools

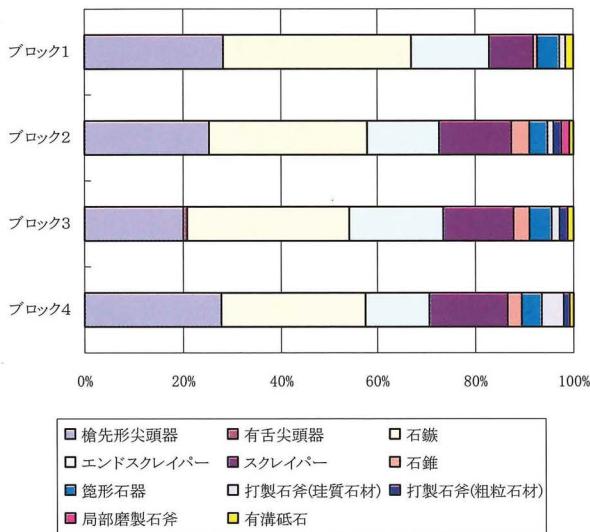


Fig.101 各ブロックの器種組成
Tool compositions in each lithic cluster

点、篦形石器67点、打製石斧61点、石錐50点、有溝砥石18点、局部磨製石斧11点、有舌尖頭器4点である。石鏸の点数は水洗選別作業の進行により、さらに増加しよう。

用途の側面から見ると、石鏸や槍先形尖頭器などの狩猟具が58.5%を占め、エンドスクレイパー、篦形石器、打製石斧といった加工工具が41.5%を占める。

技術的な側面から見ると、槍先形尖頭器や篦形石器、打製石斧などの、主に原石か大形剥片を素材として両面を加工する石器が33.8%を占め、石鏸、エンドスクレイパーなどの剥片素材の小形石器は65.1%を占める。なお、これらの石器の素材生産に関わる石核は、皆無に近い。

こうした様相はブロックごとに見ても目立った偏在性ではなく、狩猟具の槍先形尖頭器と石鏸を主体とする点、加工工具ではエンドスクレイパーを主体として各種のスクレイパー類のほかに篦形石器を安定的に組成する点などは各ブロックとも共通する (Fig.101, Table3)。なお、有舌尖頭器はブロック3に、珪質石材製の打製石斧はブロック4に、粗粒石材製の打製石斧および局部磨製石斧はブロック2に集中が見られる。

(3) 西地区における槍先形尖頭器製作

西地区で出土した槍先形尖頭器は剥離面の状態などから、①粗く大きな剥離、②面的な平坦剥離、③幅10mm程度の押圧剥離、④幅2~3mm程度の押圧剥離の4つの剥離作業内容が看取される (Fig.103)。

作業①では幅広で厚手の剥片を粗く剥離し、厚手で重量感のある両面体が製作されている。剥片剥離に際して調整は顕著でなく、打面は厚手である。

Table 3 各ブロックの器種組成 Composition of tool types and raw materials in each lithic cluster

	ブロック1	ブロック2	ブロック3	ブロック4
槍先形尖頭器 (合計)	58	161	75	42
槍先形尖頭器作業①	7	37	18	7
槍先形尖頭器作業②	35	97	39	28
槍先形尖頭器作業③	7	18	7	5
槍先形尖頭器作業④	9	9	11	2
有舌尖頭器	0	1	3	0
石鏸	79	204	125	44
エンドスクレイパー	33	92	71	20
スクレイパー	18	94	54	24
石錐	2	25	12	4
篦形石器	9	21	17	6
打製石斧 (珪質石材)	3	10	7	7
打製石斧 (粗粒石材)	0	10	5	2
局部磨製石斧	0	9	1	0
有溝砥石	3	6	4	1
合計	205	632	371	150

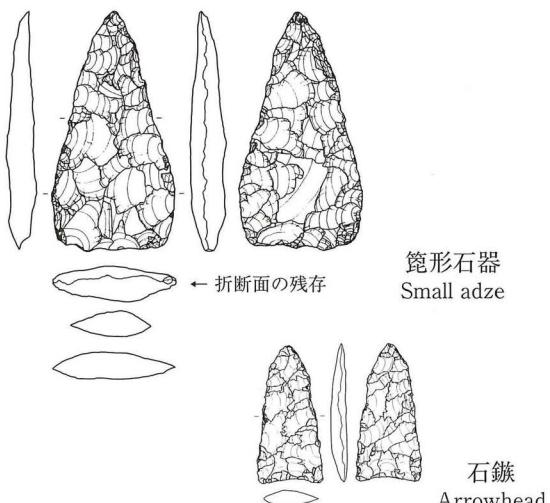


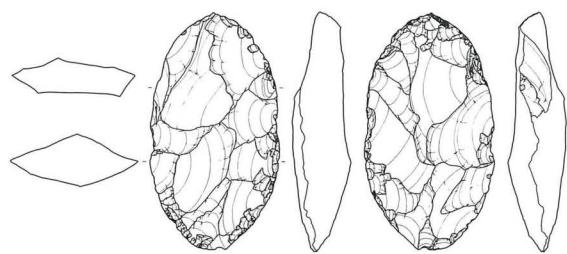
Fig.102 槍先形尖頭器折損品の転用 (S = 1/3)
Retooling of broken bifacial spear point

作業②では薄手で側縁の稜線が整った木葉形の槍先形尖頭器が製作されている。剥片剥離に際して入念な打面調整が加えられ、剥離された剥片はいわゆるポイントフレイクの特徴を備える。作業①でおおまかな素材の成形を行い、作業②で平坦剥離による仕上げを施していると考えられる。

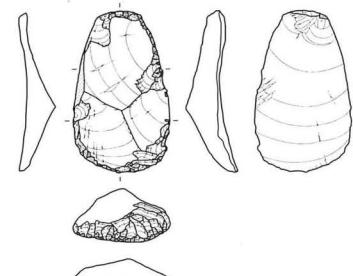
作業③では薄手の両面体が製作されている。剥片剥離に際して、側縁にブランディング状の急角度剥離または硬い物を擦り付けることによる打面調整が施されている。

作業④では薄手で側縁の稜線が整った柳葉形の槍先形尖頭器が製作されている。作業③で器面の整形と同時に平行する稜を作出し、これをを利用して作業④で仕上げを施していると考えられる。

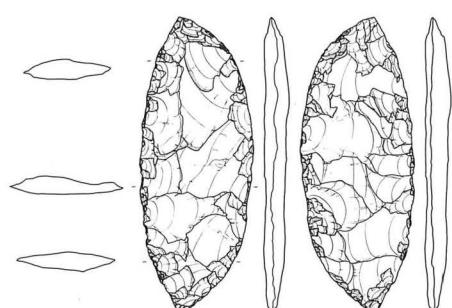
作業③・④はいずれも一定の大きさの打点が等間



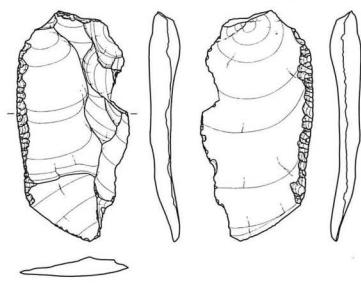
作業①
Manufacture stage 1



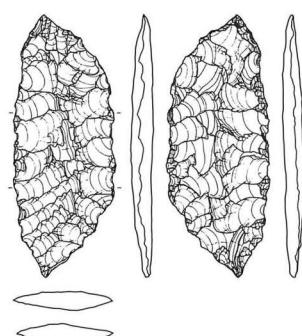
エンドスクリーパー
Endscraper



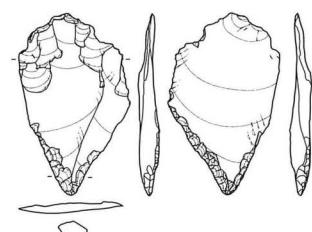
作業②
Manufacture stage 2



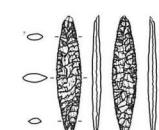
スクリーパー
Scraper



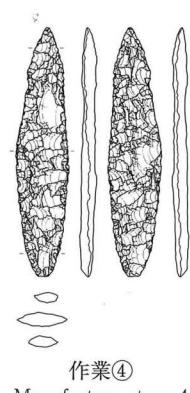
作業③
Manufacture stage 3



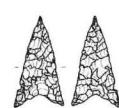
石錐
Drill



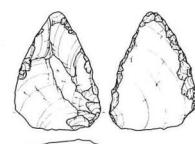
小形槍先形尖頭器
Small spear point



作業④
Manufacture stage 4



石錐
Arrowhead



石錐未製品
Unfinished arrowhead

Fig.103 槍先形尖頭器の作業内容 (S = 1/4)
Stages of bifacial spear point production

Fig.104 両面調整剥片素材の小形剥片石器 (S = 1/3)
Small flake tools made on biface reduction flake

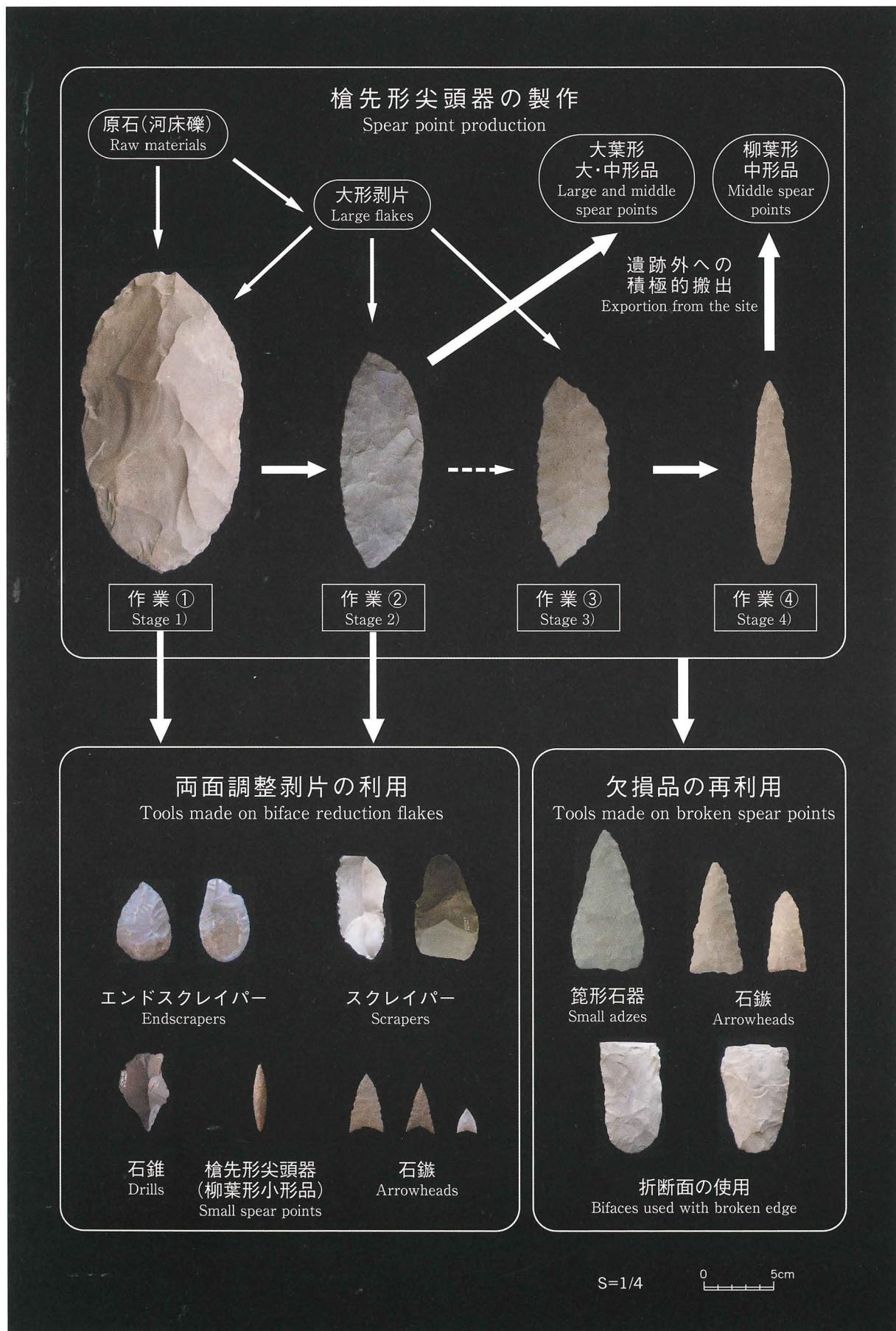


Fig.105 日向洞窟遺跡西地区の槍先形尖頭器製作を技術基盤とする石器群
Stages of bifacial spear point production and tool types made of biface reduction flakes and broken pieces

隔に並び規則的な剥離面を形成していること、打点部に潰れがみられないこと、末端部に皺状にリングが集積することなどの諸特徴から、押圧剥離によるものと判断される。ただし、作業③の資料については一部打点部がリップ形状を呈するものも見られ、ソフトハンマーなどによる直接打撃が行われた可能性も考えられる。

このような各作業内容の前後関係と出土点数などから見て、西地区では作業②で完成した大・中形の木葉形槍先形尖頭器を主体として、作業④で完成する中・小形の柳葉形槍先形尖頭器が若干製作されていたと考えられる。

西地区で出土した槍先形尖頭器の95%以上は未製品とその欠損品であり、完成品ないしはそれに近い状態に仕上げられた製品の積極的な搬出が窺われる。これとは対照的に、石鎌の42.3%、エンドスクレイパーの73.5%は完成品として残されている。石錐は尖端部に使用による磨耗が観察されるものがあり、エンドスクレイパーにも刃部が磨耗したものが散見される。しかしながら、西地区で製作された石器の膨大な数に比すれば、ここで使用された痕跡を残すものはありません。

(4) 槍先形尖頭器製作を技術基盤とする石器群

槍先形尖頭器のように両面を加工して製作される石器は、素材に対する加工の度合いが大きいため、石材消費の面ではきわめて効率性が低くなる。その一方で、槍先形尖頭器と同様に珪質頁岩を主要石材とする石鎌やエンドスクレイパーなど剥片素材の小形石器 (Fig.104) の素材生産に関わる石核は、西地区石器群においては皆無に近い。このため、剥片素材の石器は槍先形尖頭器製作で生じる両面調整剥片を適宜利用して製作されたと考えられる。このような槍先形尖頭器製作と小形剥片石器の素材生産との強い結びつきは、平面分布状況 (Fig.100) やブロックごとの器種組成 (Fig.101、Tab.3) からも裏付けられる。

主に単剥離面打面でやや厚手の剥片を素材とするエンドスクレイパーなどは、槍先形尖頭器製作初期段階の作業①、ポイントフレイクを含む薄手の剥片を素材とする石鎌などは、作業②で生じる両面調整剥片を主に使用したと考えられる。また、剥離事故による折損品についても、箆形石器や石鎌など、折損した段階に応じて転用可能な器種に作り変えられている状況が見られる (Fig.102)。

このように西地区石器群においては、槍先形尖頭

器の製作工程が各種ツールの素材生産を兼ねる、効率的な石器製作システムが存在していたと考えられる (Fig.105)。後期旧石器時代の石刃石器群においては石刃技術がナイフ形石器を含むすべてのツールの素材生産の基盤となっていたのに対し、縄文時代草創期の槍先形尖頭器石器群においては槍先形尖頭器の製作技術がその他のツールの素材生産の基盤となっていたと考えられるのである。

B 東日本の縄文時代草創期石器群の変遷

日本列島における後期旧石器時代から縄文時代草創期への移行期の石器群については、これまで主に個別器種の消長をもとにして「後期旧石器的石器群から縄文的石器群への移行」が論じられてきた。石刃石器群の消失や有舌尖頭器の出現と消失、石鎌の出現に見る狩猟具の転換もそのひとつである。しかし、石器組成とその技術基盤（主に素材生産に関わる剥片剥離技術）がどのように変化して縄文時代の石器製作技術へつながっていくかという通時的な問題については、十分検討されてこなかった。

東日本における縄文時代草創期の土器・石器組成の変遷は、I a～IV期の6期に区分される (Fig.106・107)。さらに、これを先行研究と日向洞窟遺跡西地区の研究成果に基づき、石器組成と石器製作の基盤となる剥片剥離技術の関係について検討すると、その変遷は3段階に大別することができる (Fig.106)。以下、石器による3段階区分について詳述する。

(1) 段階1：神子柴石器群 (I a期)

石刃技術を基盤とする後期旧石器的な石器に槍先形尖頭器や石斧を組成する神子柴石器群がみられる段階で、無文土器を散発的に伴う。小規模なキャンプ地と集中的な石器製作址からなる遺跡形成のあり方は後期旧石器的であり、土器の使用もきわめて限られたと考えられる。

石器組成と遺跡内での作業内容について検討すると、槍先形尖頭器や石斧を完成品の状態で保持する遺跡では、石刃核から剥離した石刃を素材としてエンドスクレイパー、スクレイパーなどのツールを製作している (A類: Fig.108)。一方、石器石材の採取地付近に立地して槍先形尖頭器や石斧を集中的に製作する遺跡では、その製作工程で生じる両面調整剥片を利用してエンドスクレイパー、スクレイパー、石錐などのツールを製作している (B類: Fig.109)。

また、B類のような槍先形尖頭器の集中的な製作と両面調整剥片の利用に加えて、石刃技術によるツール素材生産も行う遺跡もある（C類：Fig.110）。

遺跡の性格と作業内容により、両面加工技術と石刃技術による二つの素材生産が使い分けられていたと考えられ、C類の場合、完成品の槍先形尖頭器とともに石刃核が準備・搬出された可能性が高い。

A類 青森県大平山元I遺跡（青森県立郷土館1979、大平山元I遺跡発掘調査団1999）、長者久保遺跡（山内・佐藤1967）、長野県神子柴遺跡（藤沢・林1961）では、完成品として搬入された槍先形尖頭器と石斧に、石刃核と石刃素材のエンドスクレイパー、スクレイパー、彫刻刀形石器が伴っている（Fig.108）。これらの遺跡は日常的な生活址であったと考えられる。また、石刃核の製作・搬出を行う新潟県上ノ平C遺

跡（新潟県教育委員会1996）でも、伴出した槍先形尖頭器は完成品として搬入されたものである。

B類 山形県八森遺跡（山形県八幡町教育委員会2003）では、槍先形尖頭器と石斧の集中的な製作・搬出が行われており、これらの両面調整剥片を利用してエンドスクレイパー、スクレイパー、石錐が製作されている（Fig.109）。また、槍先形尖頭器の集中的な製作・搬出を行う岩手県耳取I遺跡B地区（岩手県埋蔵文化財センター1999）、群馬県房谷戸遺跡第I文化層（群馬県教育委員会ほか1992）、長野県八風山I・VI遺跡（長野県佐久市教育委員会ほか1999）、下茂内遺跡第I・II文化層（長野県教育委員会ほか1992）でも、槍先形尖頭器の両面調整剥片を利用して小数のエンドスクレイパー、スクレイパーが製作されている。

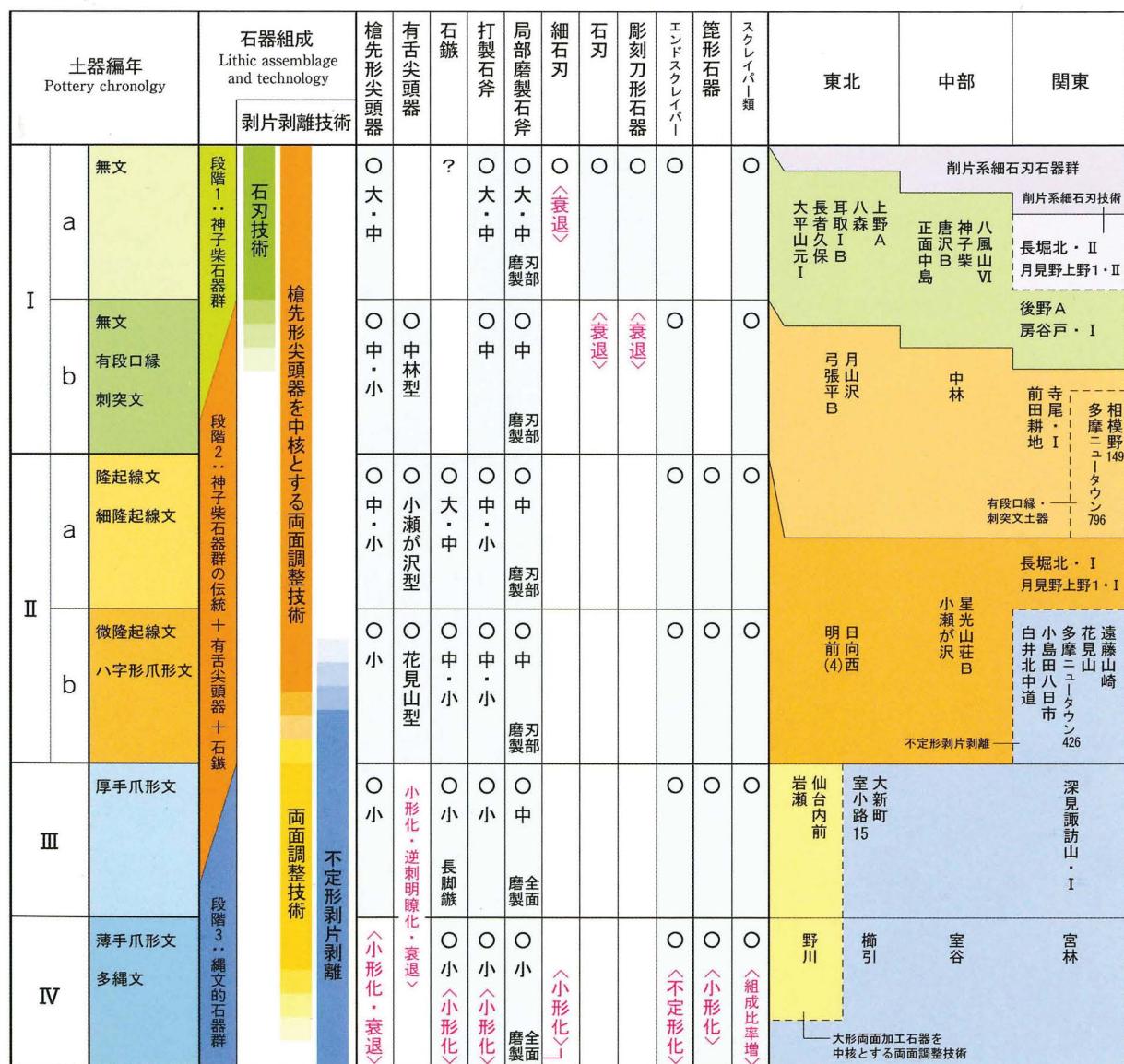


Fig.106 東北地方とその周辺における縄文時代草創期土器・石器群の変遷概念図
Chronology of pottery, lithics and major sites on the eastern main island in the Incipient Jomon

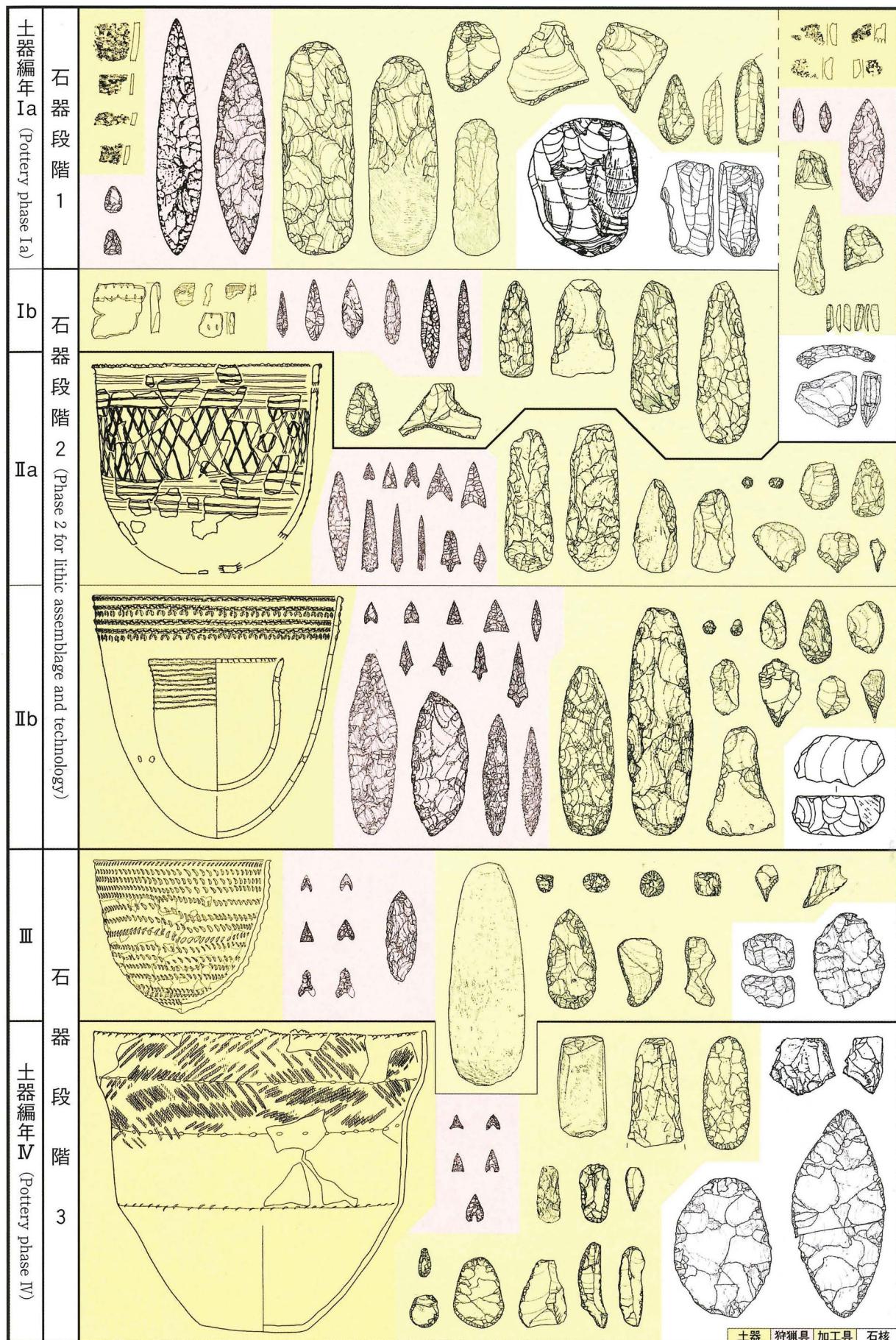


Fig.107 東北地方とその周辺における縄文時代草創期土器・石器群の変遷 (S = 1/6)

Chronology of pottery and lithic industries on the eastern main island in the Incipient Jomon

C類 新潟県正面中島遺跡（新潟県津南町教育委員会2002）では、槍先形尖頭器の集中的な製作・搬出が行われており、これらの両面調整剥片を利用してエンドスクレイパー、スクレイパー、石錐が製作されている（Fig.110）。さらに、石刃核の製作・搬出が行われており、石刃素材のエンドスクレイパー、スクレイパーも伴う。

山形県上野A遺跡（米倉ほか2002）では、槍先形尖頭器の集中的な製作・搬出が行われており、これらの両面調整剥片を素材として少数のスクレイパーと石錐が製作されている。さらに、石刃剥離と石刃を素材としたエンドスクレイパー、スクレイパー、彫刻刀形石器の製作も行われている。特に彫刻刀形石器の使用と刃部再生が集中的に行われており、槍先形尖頭器の折損品を転用した彫刻刀形石器も見られることから、石器製作址としての性格に加えて、彫刻刀形石器を使用する何らかの特定の作業との関連が考えられる。

（2）段階2：槍先形尖頭器製作を技術基盤とする石器群（神子柴石器群の伝統十有舌尖頭器十石鏃：I b・II期）

石刃技術が衰退し、槍先形尖頭器や石斧の製作で生じる両面調整剥片を利用して石鏃、小形槍先形尖頭器、エンドスクレイパー、スクレイパー、石錐などの多様なトゥールを製作する槍先形尖頭器を技術基盤とする石器群（A類：Fig.111）が卓越する段階である。狩猟具の主体は槍先形尖頭器であるが、新たに有舌尖頭器と石鏃が加わる。一方、段階2後葉（II b期）の関東地方では、槍先形尖頭器と有舌尖頭器が小形化し、これらの製作とは別にトゥールの素材生産に関わる石核を組成するようになる（B類：Fig.112）。

土器は段階2前葉（I b期）に無文・有段口縁・刺突文などの土器が散発的に見られ、段階2中・後葉（II a・II b期）には隆起線文土器群が安定的に展開する。

A類 日向洞窟遺跡西地区のほか、青森県明前（4）遺跡（青森県野辺地町教育委員会2003）、山形県弓張平B遺跡西区（山形県教育委員会1978・1979）、新潟県中林遺跡（芹沢1966）、長野県星光山荘B遺跡（長野県教育委員会ほか2000）、山梨県神取遺跡（佐野ほか1993）などの槍先形尖頭器を技術基盤とする石器群である（Fig.111）。いずれの石器群にもトゥールの素材生産に関わる石核は皆無であり、槍先形尖頭器または石斧の製作で生じる両面調整剥片が利用され

ている。

B類 神奈川県花見山遺跡（横浜市ふるさと歴史財団1995）、遠藤山崎遺跡（玉川文化財研究所2003）、万福寺遺跡群No.1遺跡（有明文化財研究所ほか2005）、群馬県白井北中道遺跡（群馬県教育委員会1998）、小島田八日市遺跡（群馬県教育委員会1994）などでは、小形化と逆刺の明瞭化が進んだいわゆる花見山型有舌尖頭器に伴って、各種トゥールの素材生産に関わる石核を組成する（Fig.112）。それらは、拳大の礫を素材とする石核から、調整技術に乏しく打面転移を頻繁に行う不定形の剥片剥離である。

日向洞窟遺跡西地区の石器群にも、ごく少数ではあるがいわゆる花見山型有舌尖頭器を組成する。土器の様相を考慮しても、上述の関東地方の石器群とは時期的に並行関係にあると考えられる（Fig.106）。このため、当該段階の東北・中部地方と関東地方の石器群では、トゥールの素材生産の技術的な様相を異にしていたことになる。これが主に石材環境に起因する行動様式の局地的な現象であるのか、より根本的な生活様式の変化に起因するのかについては、今後検討されるべき課題のひとつである。

（3）段階3：縄文的石器群への移行（III・IV期）

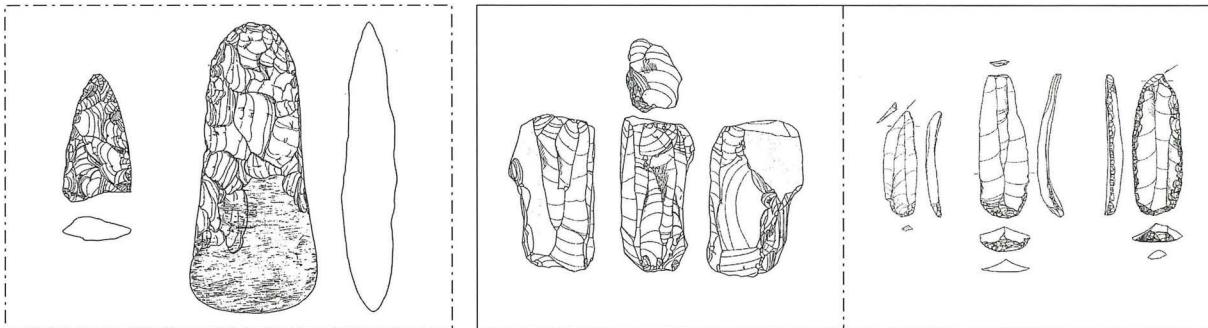
狩猟具の主体が槍先形尖頭器から石鏃へ転換し、槍先形尖頭器製作を基盤とするトゥール素材生産が崩壊する。以後、調整技術に乏しく、打面転移を頻繁に行なう石核から剥離された剥片を素材とする不定形の石器の組成比率が増加し、体系的な素材生産工程を持たない、縄文的石器群へと変化する（A類：Fig.113）。一方、東北地方の一部地域などでは、依然として槍先形尖頭器が狩猟具の主体を占めたのみならず、狩猟具としての槍先形尖頭器が衰退した後も一定期間、両面加工石器を核とするトゥール素材の生産工程が維持された（B類：Fig.114・115）。

土器は段階3前半（III期）に爪形文土器群、IV期に多縄文土器群が展開する。前者の爪形文土器は、乳房状尖底を持ついわゆる厚手爪形文土器であり、段階3後半（IV期）の多縄文土器にはいわゆる薄手爪形文土器を共伴する。

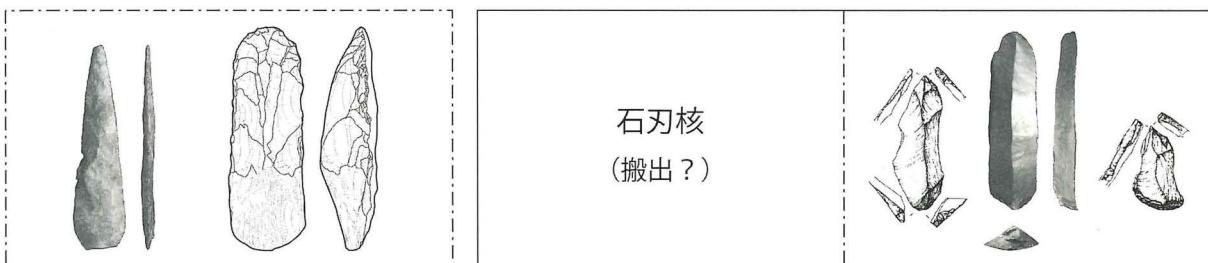
A類 岩手県大新町遺跡（岩手県盛岡市教育委員会1986・1987）、新潟県室谷洞窟遺跡下層（中村1964）では不定形の剥片を素材として石鏃、エンドスクレイパー、スクレイパー、石錐が製作されており、これらの素材を剥離したと考えられる石核を組成する（Fig.113）。また、石核が出土していないものの、神奈川県深見諏訪山遺跡第I文化層（大和市教育委員

槍先形尖頭器・石斧の搬入

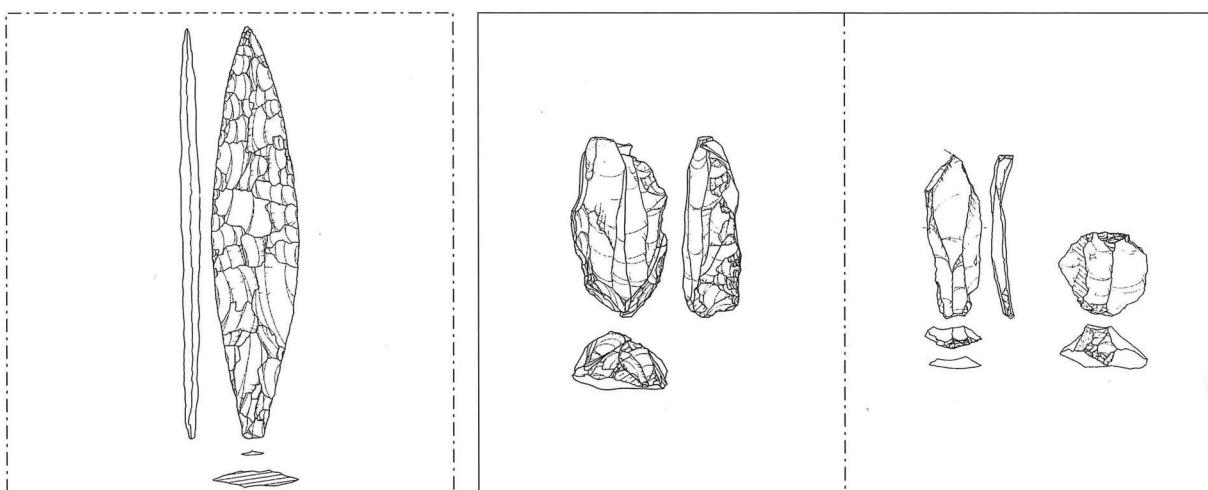
石刃技術によるトゥール素材生産



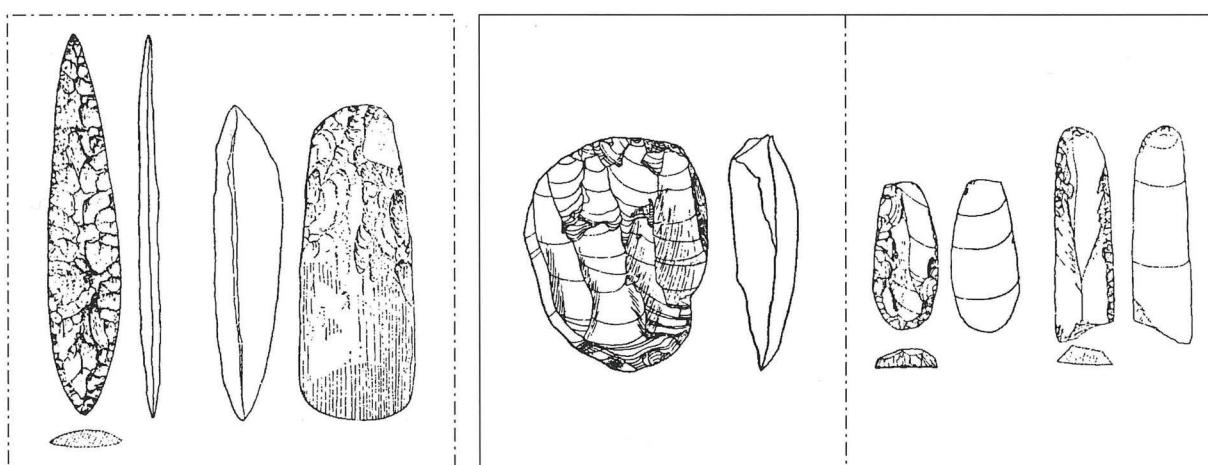
1. 青森県大平山元Ⅰ遺跡 Odaiyamamoto site, Aomori prefecture (青森県立郷土館 1979、大平元Ⅰ遺跡発掘調査団 1999)



2. 青森県長者久保遺跡 Chojakubo site, Aomori (山内・佐藤 1967、写真と石斧の実測は鈴木雅)



3. 新潟県上ノ平C遺跡 Uenotaira C site, Niigata (新潟県教育委員会 1996)



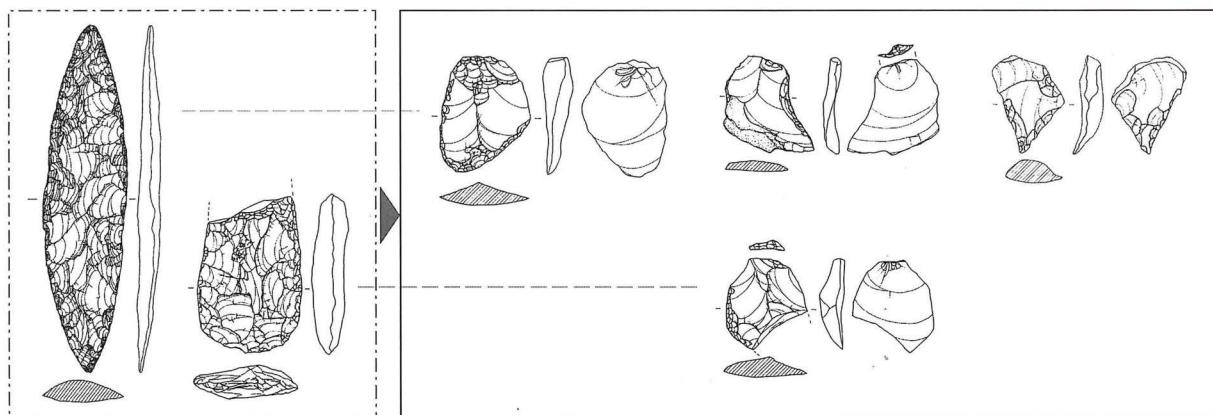
4. 長野県神子柴遺跡 Mikoshiba site, Nagano (藤沢・林 1961)

S=1/5

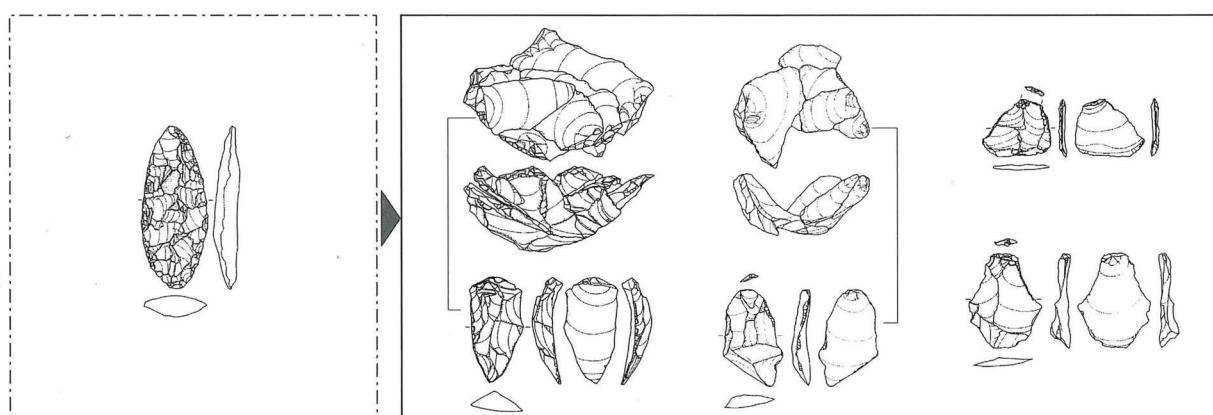
Fig.108 段階1の石器群（A類）におけるトゥール素材生産
Tool blank production system of phase 1 lithic industry, group A

槍先形尖頭器・石斧の製作

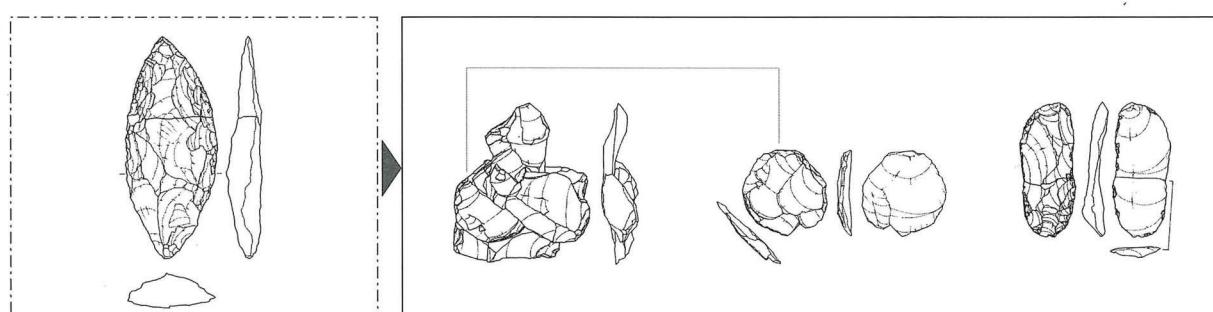
両面調整剥片のトゥール素材への利用



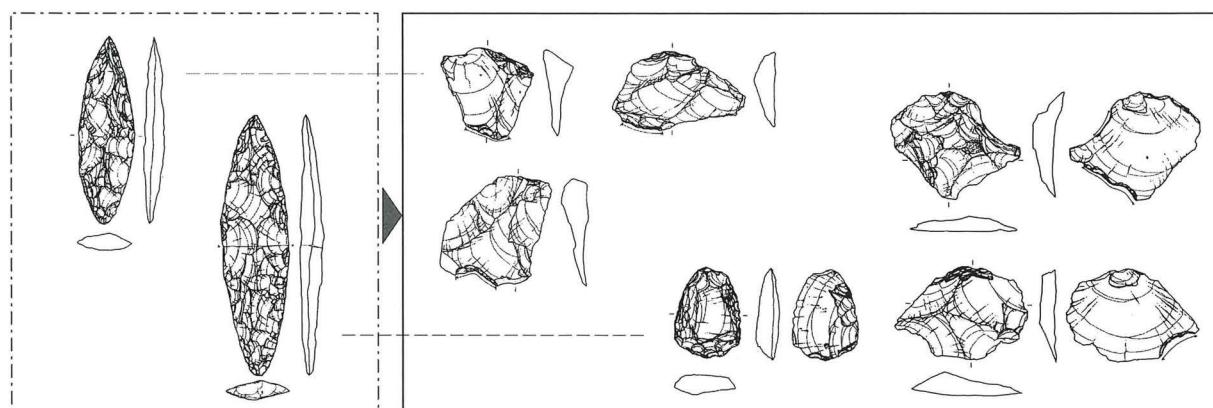
1. 山形県八森遺跡 Hachimori site, Yamagata (山形県八幡町教育委員会2003)



2. 岩手県耳取 I 遺跡 B 地区 Locality B of Mimitori site, Iwate (岩手県埋蔵文化財センター1999)



3. 群馬県房谷戸遺跡第 I 文化層 Cultural layer I of Bogaito site, Gunma (群馬県教育委員会ほか1992)

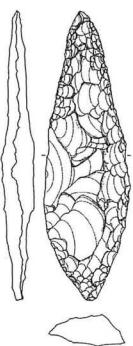


4. 長野県下茂内遺跡第 I 文化層(上段)・第 II 文化層(下段) (長野県教育委員会ほか1992)
Shimomouchi site, Nagano

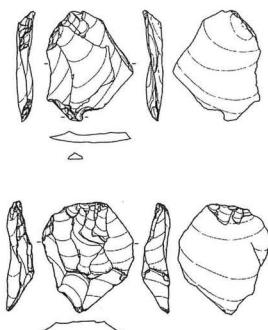
S=1/5

Fig.109 段階 1 の石器群 (B類) におけるトゥール素材生産
Tool blank production system of phase 1 lithic industry, group B

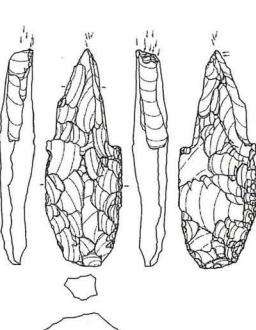
槍先形尖頭器の製作



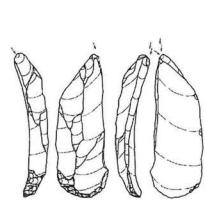
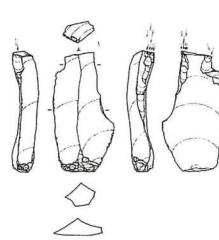
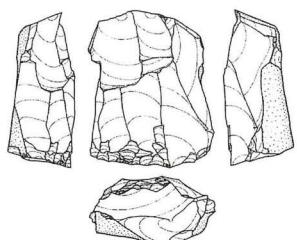
両面調整剥片のトゥール素材への利用



欠損品の転用

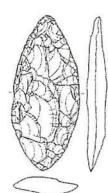


石刃技術によるトゥール素材生産

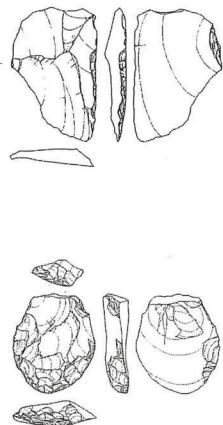
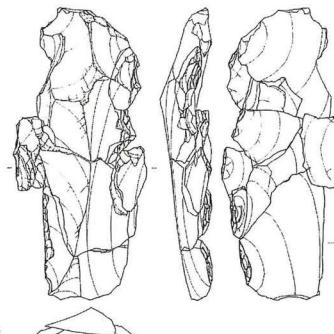


1. 山形県上野 A 遺跡 Ueno A site, Yamagata (米倉ほか編2002)

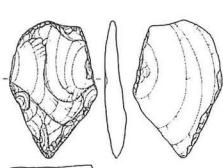
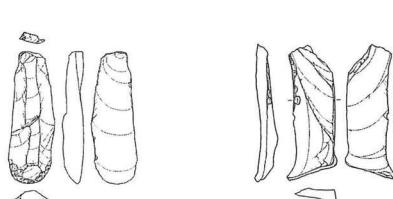
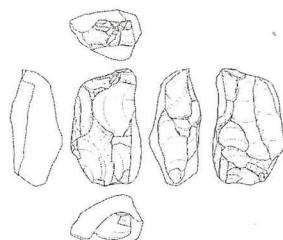
槍先形尖頭器の製作



両面調整剥片のトゥール素材への利用



石刃技術によるトゥール素材生産



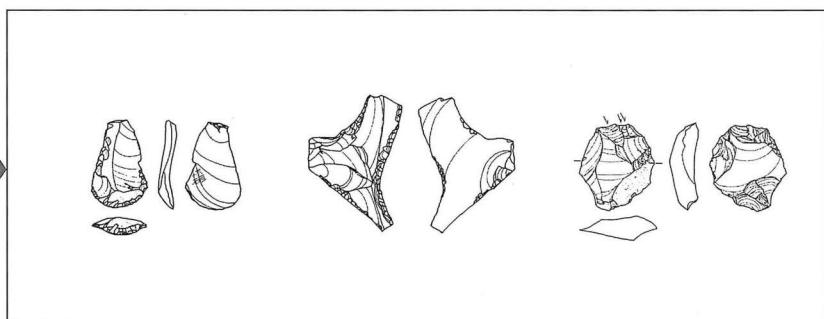
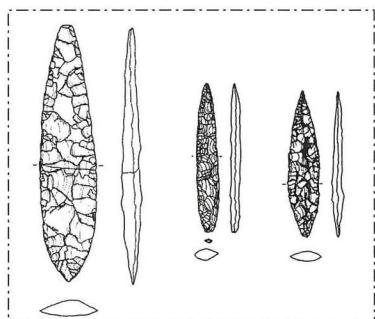
2. 新潟県正面中島遺跡 Shomennakajima site, Niigata (新潟県津南町教育委員会2002)

S=1/5

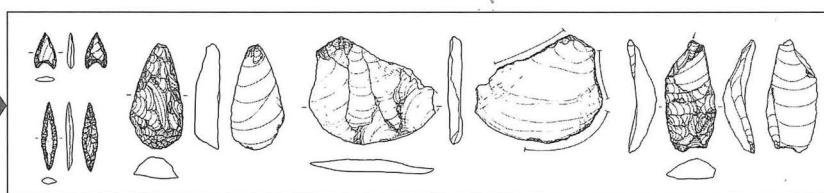
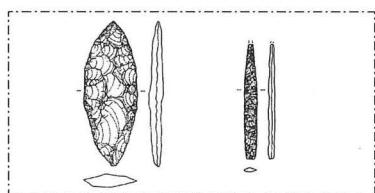
Fig.110 段階 1 の石器群 (C 類) におけるトゥール素材生産
Tool blank production system of phase 1 lithic industry, group C

槍先形尖頭器・石斧の製作

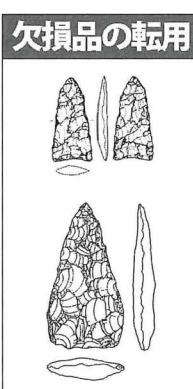
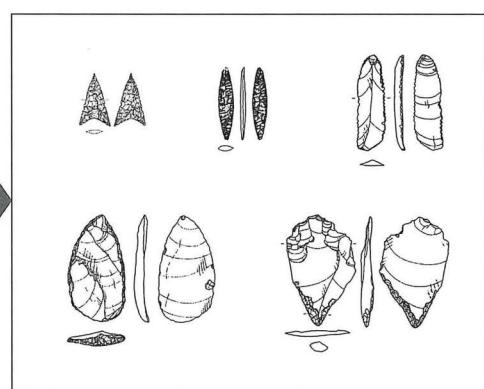
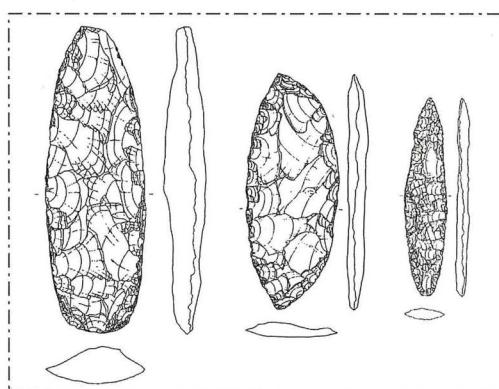
両面調整剥片のトゥール素材への利用



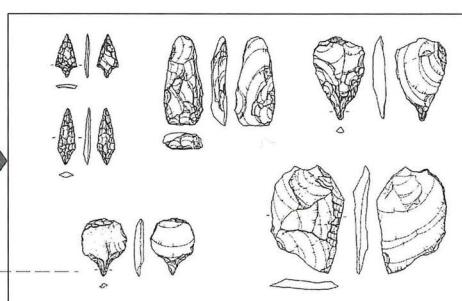
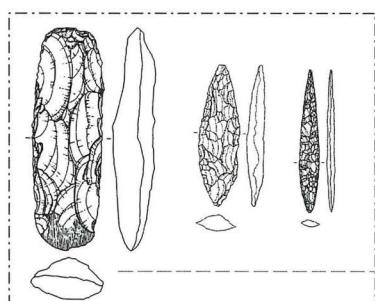
1. 山形県弓張平B遺跡西区 Yumiharidaira B site, Yamagata (山形県教育委員会 1978・1979)



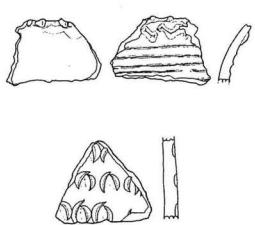
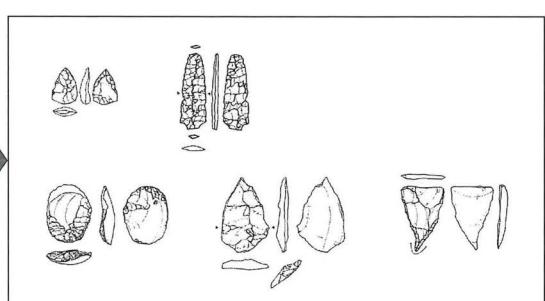
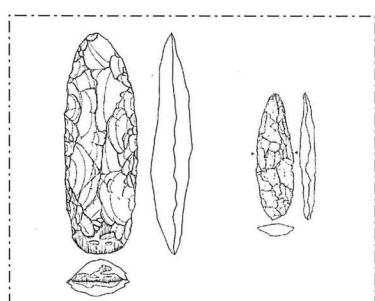
2. 青森県明前(4)遺跡 Myomae 4 site, Aomori (青森県野辺地町教育委員会 2003)



3. 山形県日向洞窟遺跡西地区 Hinata caves' western terrace, Yamagata



4. 長野県星光山荘B遺跡 Seikosanso B site, Nagano (長野県教育委員会ほか 2000)

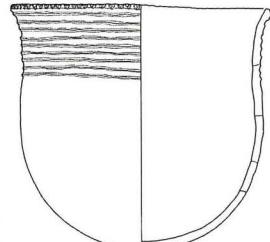
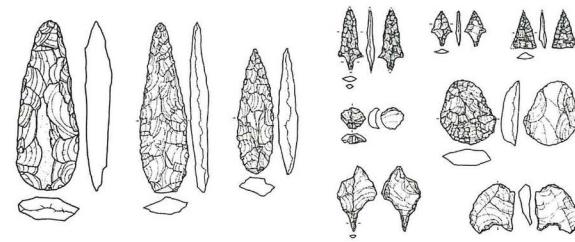
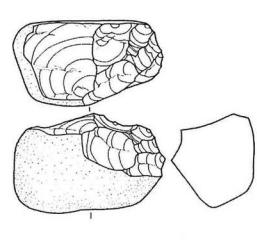


5. 山梨県神取遺跡 Kandori site, Yamanashi (佐野ほか 1993)

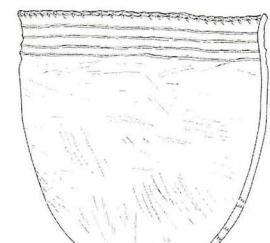
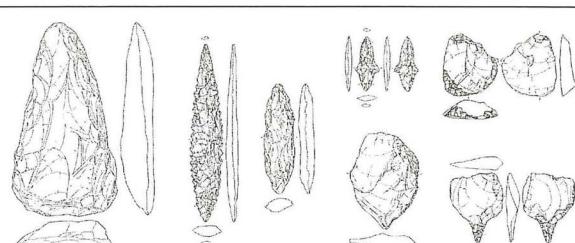
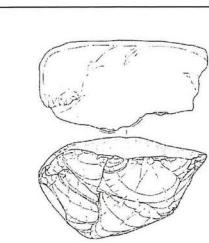
土器:S=1/3 石器:S=1/5

Fig.111 段階 2 の石器群 (A類) におけるトゥール素材生産
Tool blank production system of phase 2 lithic industry, group A, and associated pottery

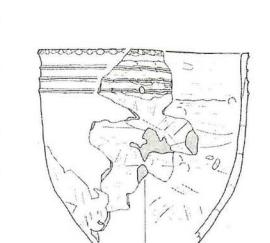
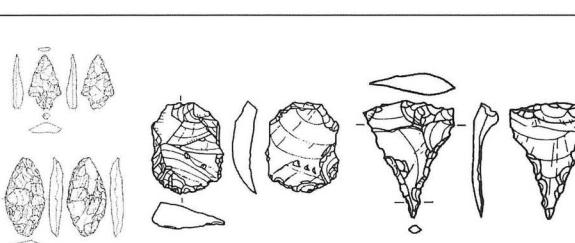
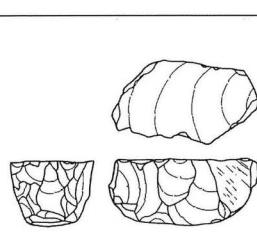
石核によるトゥール素材生産



1. 神奈川県花見山遺跡 Hanamiyama site, Kanagawa (横浜市ふるさと歴史財団 1995)



2. 神奈川県遠藤山崎遺跡 Endoyamazaki site, Kanagawa (玉川文化財研究所 2003)

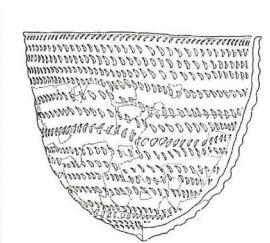
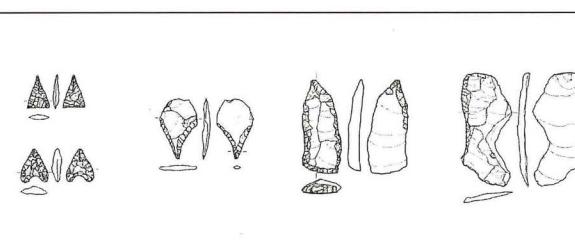
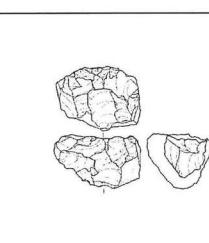


3. 神奈川県万福寺遺跡群 No.1 遺跡 (有明文化財研究所・万福寺遺跡群発掘調査団 2005)
Manpukuji No.1 site, Kanagawa

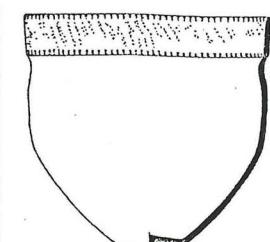
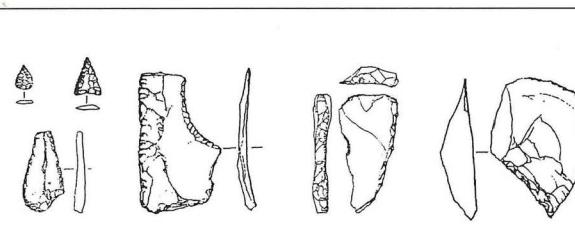
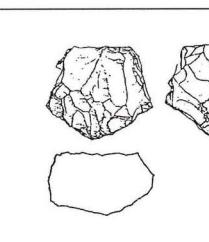
土器: S=1/6 石器: S=1/5

Fig.112 段階 2 の石器群 (B類・関東地方) におけるトゥール素材生産
Tool blank production system of phase 2 lithic industry, group B, and associated pottery

石核によるトゥール素材生産



1. 岩手県大新町遺跡 Daishincho site, Iwate (岩手県盛岡市教育委員会 1986)

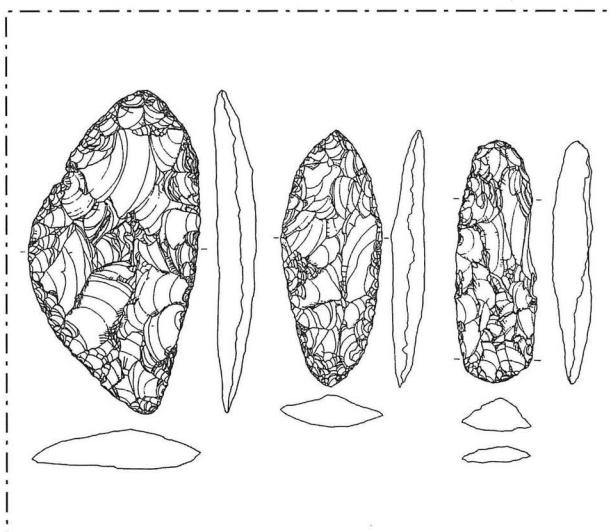


2. 新潟県室谷洞窟遺跡 Muroya cave site, Niigata (中村 1964)

土器: S=1/6 石器: S=1/5

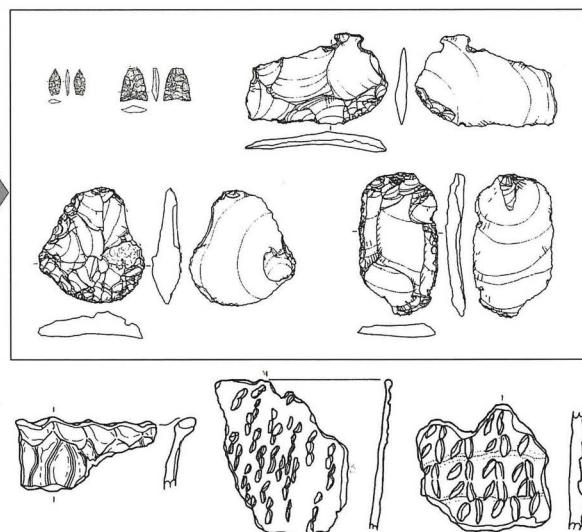
Fig.113 段階 3 の石器群 (A類) におけるトゥール素材生産
Tool blank production system of phase 3 lithic industry, group A, and associated pottery

大形ブランク・槍先形尖頭器・石斧の製作

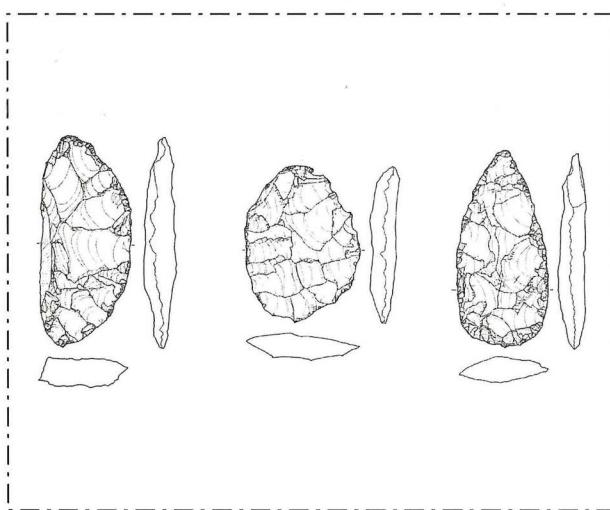


1. 秋田県岩瀬遺跡 Iwase site, Akita (秋田県教育委員会 1996)

両面調整剥片のトゥール素材への利用

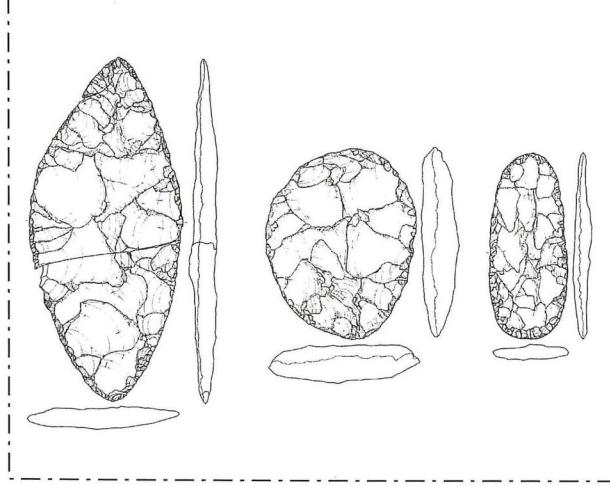
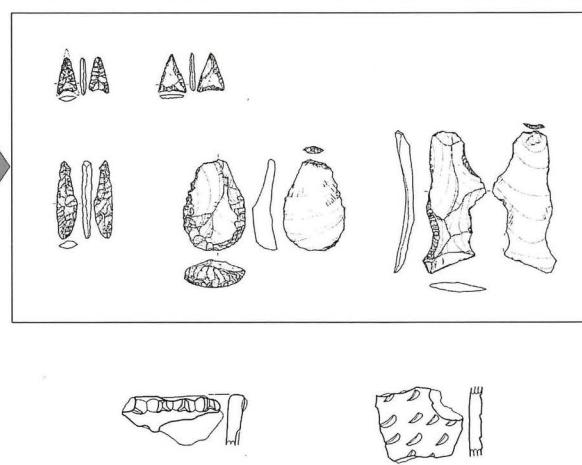


大形ブランクによる素材生産・箇形石器の製作

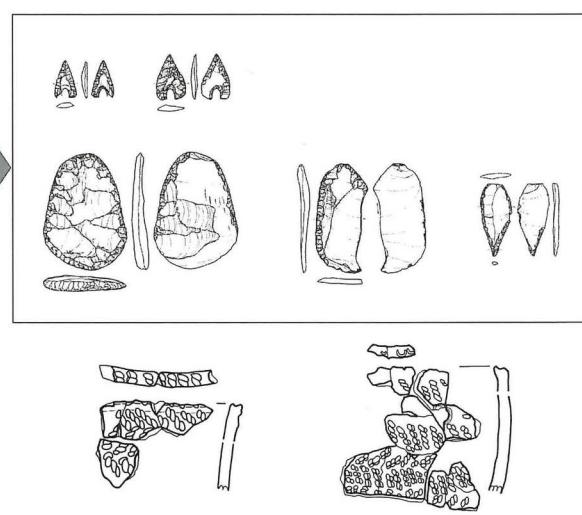


2. 福島県仙台内前遺跡 Sendaiuchimae site, Fukushima (福島市教育委員会 1996)

両面調整剥片のトゥール素材への利用



3. 宮城県野川遺跡 Nogawa site, Miyagi (仙台市教育委員会 1996)



土器: S=1/3 石器: S=1/5

Fig.114 段階3の石器群 (B類・東北地方の一部地域) におけるトゥール素材生産
Tool blank production system of phase 3 lithic industry, group B, and associated pottery (on part of the northeastern main island)

会1983)、青森県櫛引遺跡(青森県教育委員会1999)、埼玉県宮林遺跡(埼玉県埋蔵文化財調査事業団1985)においても同様の石核によるトゥール素材生産が行われたと考えられる。深見諏訪山遺跡第Ⅰ文化層では槍先形尖頭器を組成するが、剥片が素材の小形品であり、トゥールの素材生産の母体となったものではない。

B類 槍先形尖頭器と石斧の集中的な製作・搬出を行う秋田県岩瀬遺跡(秋田県教育委員会1996)では、これらの両面調整剥片を利用してエンドスクレイパー、スクレイパー、石匙が製作されている(Fig.114-1)。また、福島県仙台内前遺跡(福島市教育委員会ほか1988)、宮城県野川遺跡(仙台市教育委員会1996)では、両面加工の大形プランクから得られた両面調整剥片を利用して石鏸、エンドスクレイパー、スクレイパー、石錐が製作されている(Fig.114-2・3)。

なお、北海道帯広市大正3遺跡では爪形文土器を伴う石器群が調査され、最近報告された(北海道帯広市教育委員会2006)。これまで北海道地方においては、本州の縄文時代草創期石器群に明確に対比できる資料は皆無であり、当該期の本州と北海道地方の関係を考える上できわめて重要な資料である。非石刃素材の石器組成は小形の槍先形尖頭器、菱形の石鏸、範形石器、エンドスクレイパー、スクレイパー、彫刻刀形石器、石錐、ノッチなどである(Fig.115)。石鏸の形態が異なること、彫刻刀形石器とノッチの組成比率が高いことは、本州の当該期石器群との差異として挙げられる。槍先形尖頭器の未製品と考えられる両面加工石器が多数存在し、槍先形尖頭器の集中的な製作・搬出が窺われる。また、これによって生じた両面調整剥片を利用して石鏸、エンドスク

レイパー、彫刻刀形石器、ノッチなど各種のトゥールが製作される状況(Fig.115)は、日向洞窟遺跡西地区など段階2の槍先形尖頭器石器群に見られる石器製作システムの様相とも非常によく一致している。

C まとめ

後期旧石器時代終末期の東日本には、削片系細石刃石器群が展開していた。これは主として湧別技法による細石刃技術が北海道から津軽海峡を越えてもたらされ、東日本の広範な地域に急速に波及したものと考えられる。それまでナイフ形石器やエンドスクレイパー、スクレイパー、彫刻刀形石器、石錐などのトゥールの素材生産を統括していた石刃技術(Fig.116-1)は衰退または潜在化し、細石刃核プランクの製作で生じる両面調整剥片を素材としてエンドスクレイパー、スクレイパー、荒屋型彫刻刀形石器が製作されるようになる(Fig.117)。

細石刃技術が衰退、消滅した縄文時代草創期の段階1においては、最重要狩猟具が植刃槍から槍先形尖頭器へ移行する。その結果、槍先形尖頭器の製作で生じる両面調整剥片をトゥール製作の素材とする技術基盤が確立する。これは製作地において顕著であるが、遊動性の高いキャンプ地などでは、依然として効率性の高い石刃技術が使用される状況もある。

日向洞窟遺跡西地区を含む段階2においては、石刃技術が消滅し、槍先形尖頭器の製作が素材剥片供給の技術的中核をなすようになる(Fig.116-2)。日向洞窟遺跡西地区では、槍先形尖頭器とともに膨大な数の石鏸が製作されているが、前述した技術基盤は

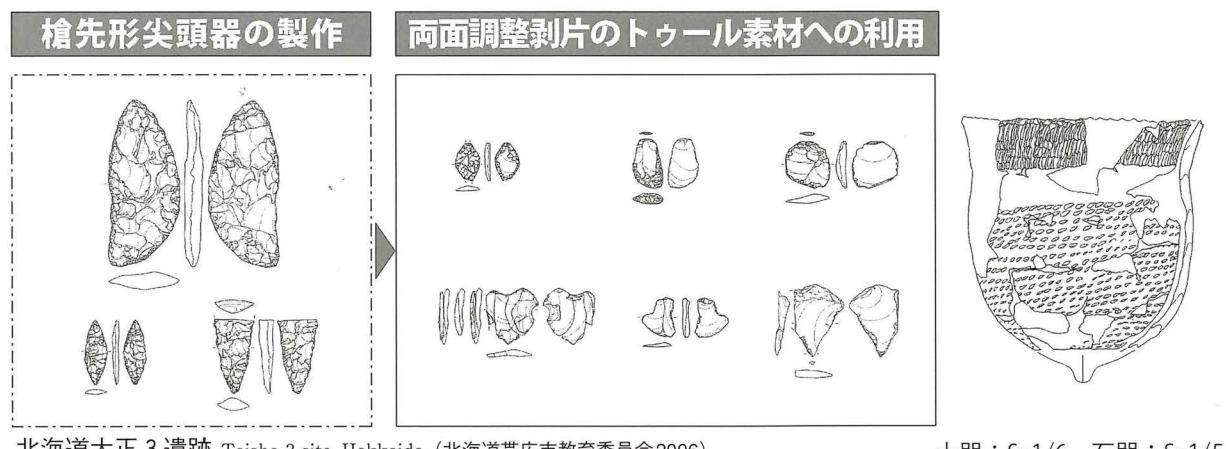


Fig.115 段階3の石器群(B類・北海道地域)におけるトゥール素材生産
Tool blank production system of phase 3 lithic industry, group B, and associated pottery (on Hokkaido)

保持されている。段階2の後葉の事例といえる。

段階3は狩猟具の主体が、槍先形尖頭器から石鏃へ移行する。また、槍先形尖頭器の小形化は、素材剥片供給元としての地位を大きく低下させた。こうして槍先形尖頭器の製作を基盤とする技術システムは次第に崩壊し、不定形剥片を用いる縄文的剥片剥離技術へと移行する。

なお、東北地方の一部では、槍先形尖頭器の衰退後も一定期間、両面加工石器を核とする石器製作システムが維持されていた。この様相とは対照的に、関東地方ではすでに段階2後葉に槍先形尖頭器がいち早く小形化し、いわゆる花見山型有舌尖頭器が狩

猟具の主体を占めており、槍先形尖頭器の製作を基盤とする技術システムが明瞭には認められない。

つまり、東日本の中でも南寄りの地域では、大形の槍先形尖頭器を必要としない狩猟法の確立や、長距離の移動を必要としない居住形態への移行などに伴って、いち早く在地の多様な石材環境に適応し、縄文的石器群へと変化していた可能性が考えられよう。今後このことについて個々の石器群を対象とした比較検討が必要であるが、このような地域性と、そこに南北地域間での時間差を想定することは、当該期の文化変容を理解する上で欠かせない視点となるであろう。

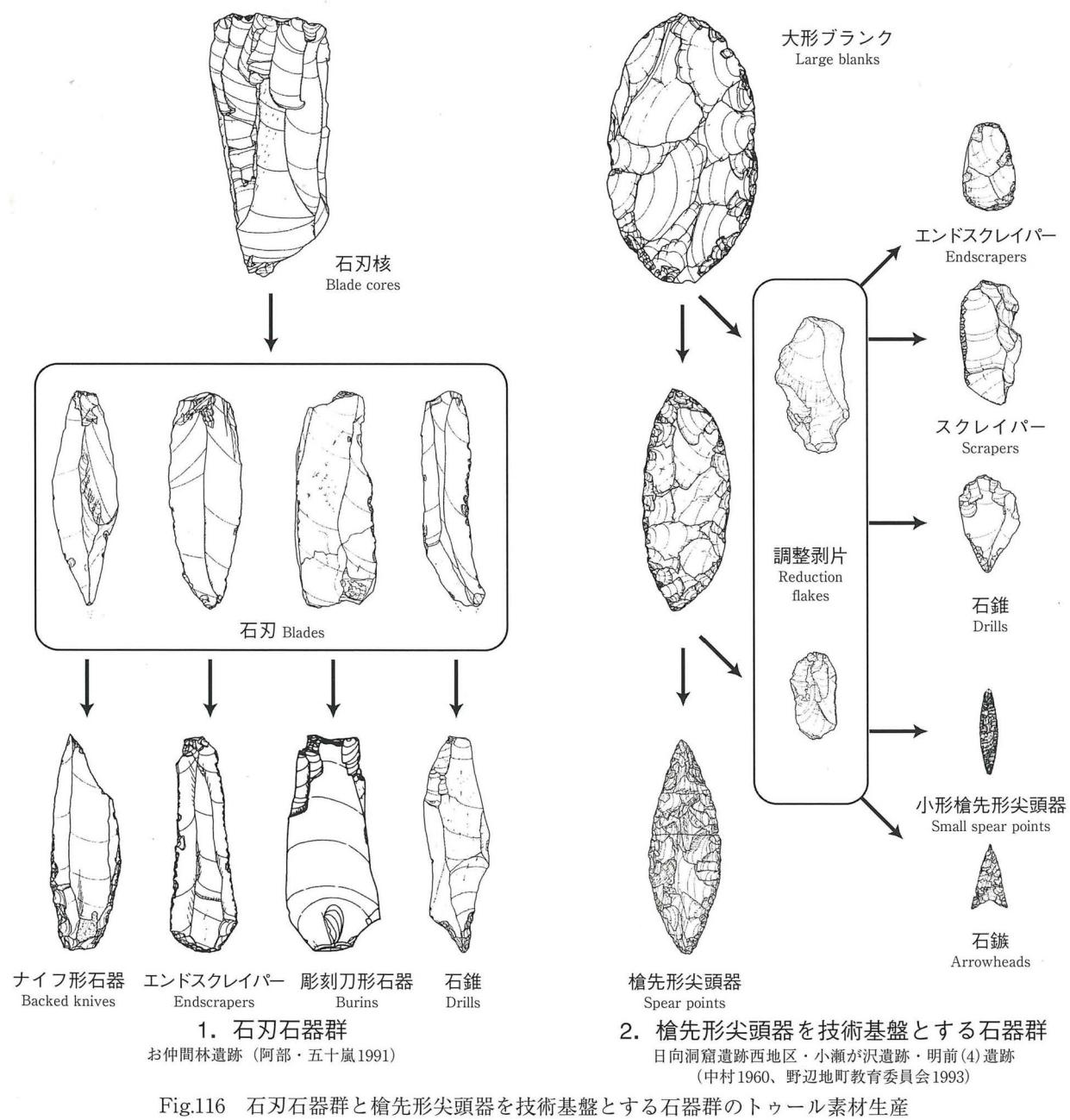
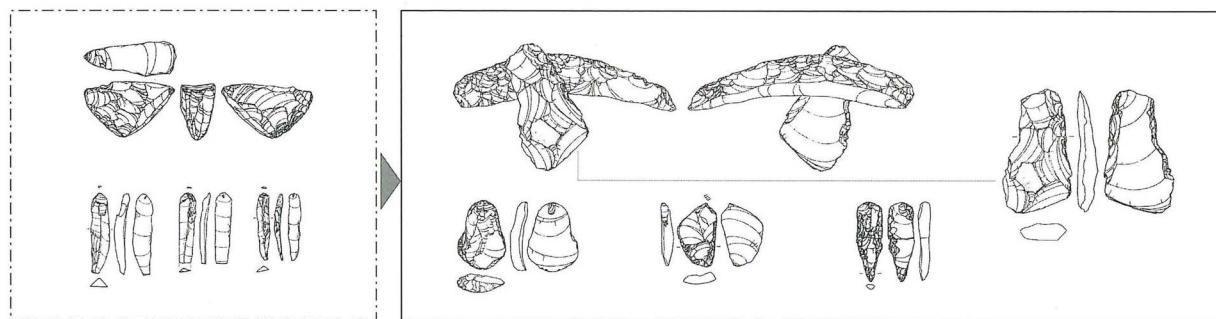


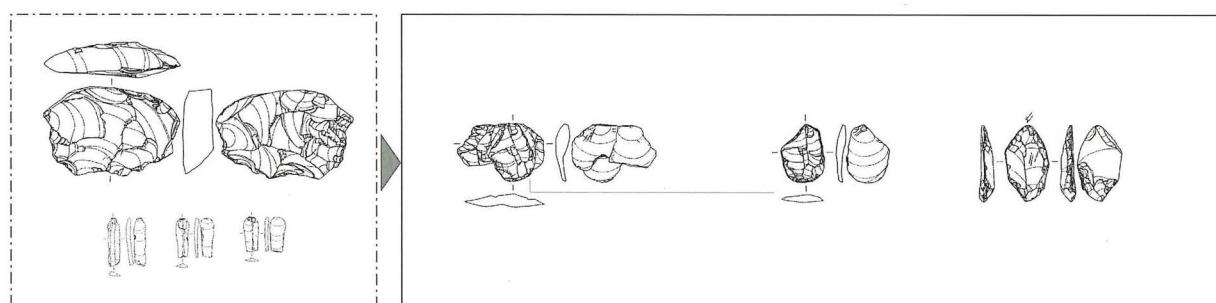
Fig.116 石刃石器群と槍先形尖頭器を技術基盤とする石器群のトゥール素材生産
Comparison of tool blank production system between blade industry and bifacial spear point industry

細石刃核ブランクの製作

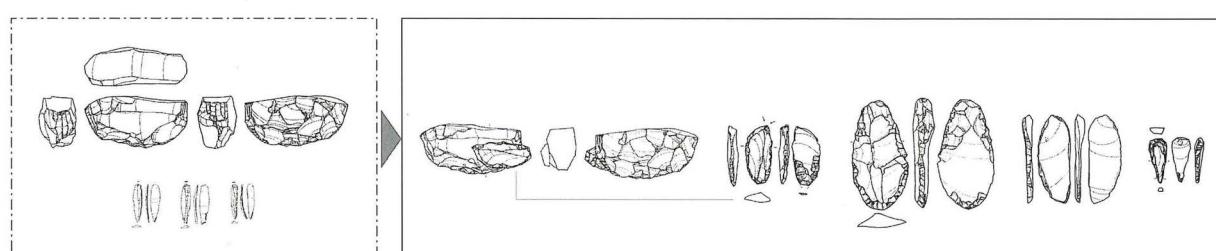
両面調整剥片のトゥール素材への利用



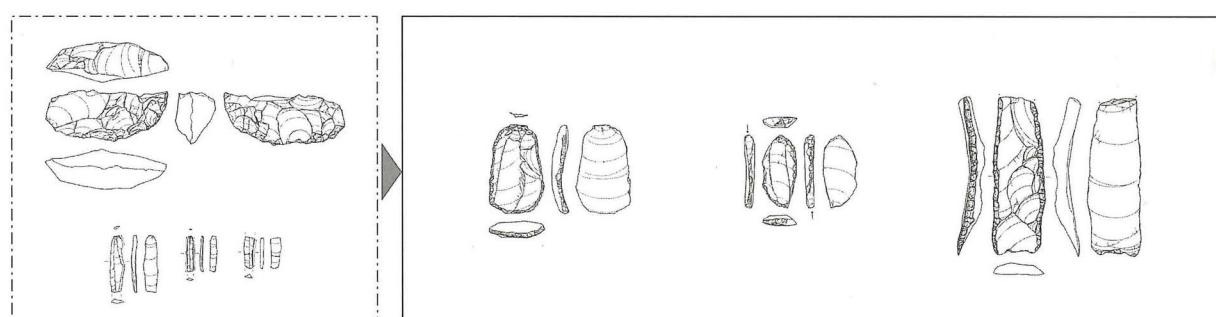
1. 山形県角二山遺跡 Kakuniyama site, Yamagata (桜井 1992、鹿又 2004)



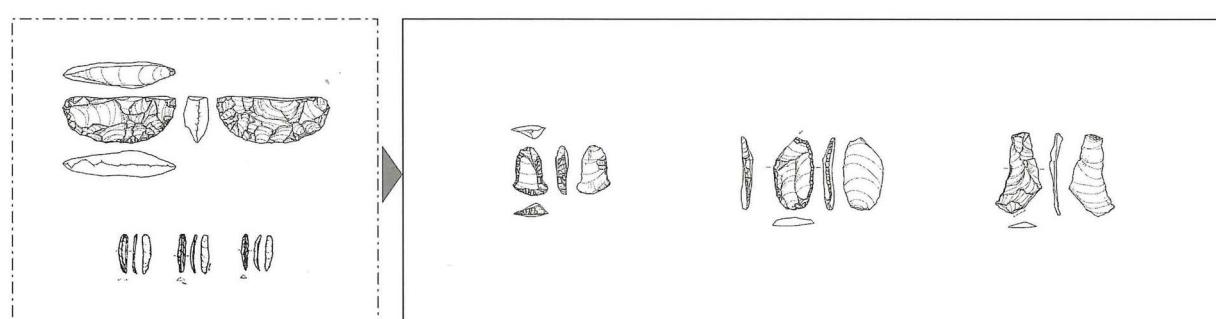
2. 福島県学壇遺跡 D 地区 Locality D of Gakudan site, Fukushima (福島市教育委員会ほか 1995)



3. 新潟県荒屋遺跡 Araya site, Niigata (東北大学考古学研究室ほか 2003)



4. 新潟県正面中島遺跡 Shomennakajima site, Niigata (新潟県津南町教育委員会 2002)



5. 埼玉県白草遺跡 Shirakusa site, Saitama (埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993)

S=1/5

Fig.117 削片系細石刃石器群におけるトゥール素材生産
Tool blank production system in wedge-shaped microblade core industry

引用・参考文献

- 秋田県教育委員会 1996『岩瀬遺跡－東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XXII－』(秋田県文化財調査報告書第263集)
- 青森県教育委員会 1999『柳引遺跡－東北縦貫自動車道八戸線建設事業に伴う遺跡発掘調査報告書－』(青森県埋蔵文化財調査報告書第263集)
- 青森県野辺地町教育委員会 2003『明前(4)遺跡・明前(5)遺跡・野辺地蟹田(11)遺跡－国道279号有戸バイパス道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告書－』(野辺地町文化財調査報告書第9集)
- 青森県立郷土館 1979『大平山元I遺跡発掘調査報告書』(青森県立郷土館調査報告第5集:考古-2)
- 青森県立郷土館 2000『東北町長者久保遺跡・木造町丸山遺跡』(青森県立郷土館調査報告第44集:考古-12)
- 阿部祥人・五十嵐彰(編) 1991『お仲間林遺跡1986』「慶應義塾大学文学部民族学・考古学研究室小報」8
- 有明文化財研究所・万福寺遺跡群発掘調査団 2005『神奈川県川崎市万福寺遺跡群』
- 井田秀和 1988「山形県高畠町日向洞窟遺跡・西地区(第1次、第2次調査)」『第2回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』pp.12-16
- 井田秀和 1990「山形県東置賜郡高畠町日向洞窟遺跡・西地区」『日本考古学年報41(1988年度版)』pp.424-427の図版12-13、日本考古学協会
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999『耳取I遺跡B地区発掘調査報告書－東北横断自動車道秋田線関連遺跡発掘調査－』(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第292集)
- 岩手県盛岡市教育委員会 1986『大館遺跡群 大新町遺跡・大館町遺跡－昭和60年度発掘調査概報－』
- 大平山元I遺跡発掘調査団編 1999『大平山元I遺跡の考古学調査－旧石器文化の終末と縄文文化の起源に関する問題の探究－』
- 柏倉亮吉・加藤 稔 1967「山形県下の洞穴遺跡」『日本の洞穴遺跡』pp.51-65、日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会、平凡社
- 加藤 稔 1967「山形県日向洞穴における縄文時代初頭の文化」『山形史学研究』第5号、pp.27-47、山教史学会
- 鹿又喜隆 2004「大石田町立歴史民俗資料館所蔵の角二山遺跡細石刃石器群の研究」『山形考古』第7巻第4号、pp.19-32
- 群馬県教育委員会 1992『房谷戸遺跡II』「関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書」第40集(群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第129集)
- 群馬県教育委員会 1994『小島田八日市遺跡－主要地方道藤岡大胡線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1－』(群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第175集)
- 群馬県教育委員会 1998『白井遺跡群(白井二位屋遺跡・白井南中道遺跡・白井丸岩遺跡・白井北中道遺跡)』(群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第232集)
- 小熊博史・前山精明 1993「新潟県小瀬が沢洞窟遺跡出土遺物の再検討」『日本考古学協会1993年度新潟大会シンポジウム1環日本海における土器出現期の様相』pp.53-146、日本考古学協会新潟大会実行委員会
- (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993『白草遺跡I・北篠場遺跡』(埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第129集)
- (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1985『大林I・II 宮林下南原－国道140号バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告－』(埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第50集)
- 桜井美枝 1992「細石刃石器群の技術構造－山形県角二山遺跡の分析－」『加藤稔先生還暦記念東北文化論のための先史学歴史学論集』pp.441-462、加藤稔先生還暦記念会
- 佐々木洋二 1971『高畠町史 別巻 考古資料編』高畠町史編纂委員会
- 佐々木洋二 1973「山形県における縄文草創期文化の研究I」『山形県立博物館研究報告』第1号、pp.47-65
- 佐野隆・加藤博文・小宮山隆 1993「明野村神取遺跡出土の縄文時代草創期の遺物について」『山梨県考古学協会誌』第6号、pp.56-75、山梨県考古学協会
- 渋谷孝雄 1990「山形県」『日本考古学年報』41(1988年度版)、pp.92-99、日本考古学協会
- 鈴木雅・佐川正敏・大場正善 2005「山形県高畠町日向洞窟遺跡西地区出土縄文時代草創期石器群の再検討(1)」『日本旧石器学会第3回講演・研究発表・シンポジウム予稿集』pp.10-13、日本旧石器学会
- 芹沢長介 1966「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器の研究」『日本文化研究所研究報告』第2集、pp.1-68、東北大学文学部附属日本文化研究施設
- 仙台市教育委員会 1996『野川遺跡』(仙台市文化財調査報告書第205集)
- 玉川文化財研究所 2003『神奈川県藤沢市遠藤山崎・遠藤広谷遺跡発掘調査報告書』
- 千曲川水系古代文化研究所 1998『唐沢B遺跡－後期旧石器時代末から縄文時代草創期にかけての移行期の石器群－』東北大学考古学研究室・新潟県北魚沼郡川口町教育委員会2003『荒屋遺跡－第2・3次発掘調査報告書－』
- 中村孝三郎 1964『室谷洞窟』「長岡市立科学博物館研究報告」

- 第6冊、長岡市立科学博物館考古学研究室
 中村孝三郎 1960『小瀬が沢洞窟』『長岡市立科学博物館研究報告』第3冊、長岡市立科学博物館考古学研究室
 長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センターほか
 1992『下茂内遺跡-上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書1<佐久市内 その1>-』(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書11)
 長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センターほか
 2000『星光山荘A・星光山荘B・西岡A・貫の木・上ノ原・大久保南・東裏・裏ノ山・針ノ木・大平B・日向林A・日向林B・七ツ栗・普光田-上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書16<信濃町内 その2>-』(長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書49)
 長野県佐久市教育委員会ほか 1999『ガラス質黒色安山岩原産地遺跡 八風山遺跡群-長野県佐久市大字香坂八風山遺跡群発掘調査報告書-』(佐久市埋蔵文化財調査報告書第75集)
 新潟県教育委員会 1996『上ノ平遺跡C地点-磐越自動車道関係発掘調査報告書-』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第73集)
 新潟県津南町教育委員会 2002『正面中島遺跡-国営農地再編パイロット事業に伴う遺跡発掘調査報告書-』(津南町文化財調査報告書第37輯)
 秦 昭繁 1998「珪質頁岩とその分布」『月刊考古学ジャーナル』No.432、pp.31-35、ニュー・サイエンス社
 秦 昭繁 2003「東北地方の珪質頁岩石材環境」『月刊考古学ジャーナル』No.499、pp.8-11、ニュー・サイエンス社
 福島市教育委員会 1995『学壇遺跡群-南福島ニュータウン埋蔵文化財発掘調査報告-』(福島市埋蔵文化財報告書第67集)
 福島市教育委員会 1988『仙台内前遺跡-縄文時代草創期、中・近世墓坑の調査- <昭和62年度沢小屋地区土地改良総合整備事業(小規模排水対策特別事業)関連遺跡調査報告>』(福島市文化財報告書第25集)
 藤沢宗平・林茂樹 1961「神子柴遺跡-第一次発掘調査概報-」『古代学』9-3、古代学協会
 北海道帯広市教育委員会 2006『帯広・大正遺跡群2』(帯広市埋蔵文化財調査報告第27冊)
 山形県教育委員会 1978『弓張平遺跡-第1・2次調査報告書-』(山形県埋蔵文化財調査報告書第15集)
 山形県教育委員会 1979『弓張平B遺跡-第3・4次発掘調査報告書-』(山形県埋蔵文化財調査報告書第21集)
 山形県八幡町教育委員会 2003『八森遺跡-先史編・先史図録編-』(八幡町文化財調査報告書第13集)
 山内清男・佐藤達夫 1967「下北の無土器文化-青森県上北郡東北町長者久保遺跡発掘報告-」『下北-自然・文化・社会-』九学会連合下北調査委員会、平凡社
 大和市教育委員会 1983『深見諫訪山遺跡-神奈川県大和市深見所在の縄文時代草創期・先土器時代遺跡調査の記録-』(大和市文化財調査報告書第14集)
 (財)横浜市ふるさと歴史財団 1995『花見山遺跡』『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告』XVI
 米倉薰・阿部祥人(編) 2002『山形県西村山郡西川町上野A遺跡発掘調査報告書-尖頭器製作址の研究-』(慶應義塾大学文学部民族学・考古学研究室報告13)